



Title	モダリティの範囲の再検討 : 助動詞としての「ものだ」とモダリティ助動詞との承接順序からみる
Author(s)	張, 力丹
Citation	国語国文研究, 160, 66(1)-51(16)
Issue Date	2023-03-20
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/91666">https://hdl.handle.net/2115/91666</a>
Type	journal article
File Information	160-4.pdf



# モダリティの範囲の再検討

—— 助動詞としての「ものだ」とモダリティ助動詞との

承接順序からみる ——

張 力 丹

## 1. はじめに

形式名詞の「もの」にコピュラの「だ」を後接した「ものだ」がモダリティ助動詞と複合できることは言うまでもないが、助動詞としての「ものだ」もモダリティ助動詞と複合することがある。しかしながら、モダリティ助動詞と複合することで形成した複合形式における助動詞の「ものだ」の意味用法がまだ解明されていない。本稿は助動詞の「ものだ」が「たい」「(し) そうだ」「だろう」「のだ」といった4つのモダリティ助動詞との複合形式に注目する。「たいものだ」「(し) そうなものだ」「ものだろう」「ものなのだ」における「ものだ」が助動詞として働くことがあるため、その意味用法をまず明らかにする。

そして、益岡 (1991) や高梨 (2010) などは、「ものだ」をモダリティ形式の一種として認めている。ただ、モダリティを表す言語形式と認められるのは、話し手が望ましいことを提示することで聞き手の行為を促す用法、つまり〈当為〉を表す「ものだ」のみである。〈当為〉以外の意味用法はモダリティと関わらないのか、それについてまだ検討の余地があると考えられる。

また、助動詞としての「ものだ」はモダリティ助動詞と隣接したらどのような事情が発生するのかもまだ判明していない。



図1 日本語文の基本構造 (仁田 1991 : 17)

モダリティについての研究のほとんどは、文が命題とモダリティという質的に異なった2つの部分からなるという見方を立っている。文の基本構造によく引用されるものを図1で提示する。言表事態はいわゆる命題にあたり、言表態度はモダリティに当てはまるのである。図1が示している命題とモダリティとの境界線は紛らわしいところがなくはっきりしているように見える。仁田 (1991) や益岡 (2007) の定義に明

らかなように、モダリティは確かに命題と質的に異なる、命題に対する捉え方・伝達態度のことである。しかしながら、述部に現れた上記の4つの複合形式に注目して、それぞれの承接順序を検討したところ、その2つの概念が完全に分離したものではないと考えられる。このように、その検討を通じてモダリティの範囲を再検討することを本稿の3つ目の目的としている。

## 2. 本研究の捉え方

本節では先行研究を踏まえながら本稿の捉え方を提示する。

### 2.1 助動詞としての「ものだ」

寺村(1984)より始まると言える助動詞化した「ものだ」についての研究は、〈一般性〉や〈当為〉など特別な意味が派生した「ものだ」を助動詞化したものと認めているが、その認定に形態論的な根拠が欠けたままなされてきている。特別な意味が「ものだ」に読み取れれば、助動詞化したものと認めればいいという意味合いが濃く見て取れる。

助動詞化というのは一種の構文化である。そもそも2つの要素である形式名詞の「もの」とコピュラの「だ」は形態的に結合して一つの文法要素になり、その過程において特定の意味機能が派生しているのである。当然のことながら、「ものだ」を助動詞と認める必要がない、または認めがたいとする先行研究も存在している。橋本文法を基盤とする学校文法において、「そうだ」「ようだ」は助動詞に含まれているが、「ものだ」「ことだ」はその範囲に除外されている。したがって、「ものだ」を助動詞として認められるかどうかという問題は、助動詞の認定基準に行き着くと考えられる。

「活用する付属語」(寺村1984:50)や「辞に分類される自立的でないもののうち、活用するもの」(加藤2006:35)など助動詞についての定義より、ア)独立語でなく付属語、イ)活用を持つこと、は助動詞を認定するにあたっての必要条件であると考えられる。当然のことながら、「ものだ」には独立した使い方がない。しかも、整った活用体系を持っていると主張する。確かに「ものだ」の活用はすべて「だ」の活用体系から由来したものであるが、「だ」の活用を単なる受け継いだままではなく、独自の活用体系を持つようになった。特に、「ものだ」の連体形は「ものだ」、もしくは「ものな」「ものの」でなく「ものである」という点は興味深いところである。それは補充法により「ものである」という別系統の連体形から借りられたものであると考えられる。この点についての検討は別稿に譲るが、ここで「ものだ」の活用体系を挙げておきたい。

表1 【助動詞「ものだ」の活用】

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
mono-	-de	-de	-da	-dearu	-nara (ba)	—

表1で示したように、「mono-」を語幹として助動詞「ものだ」の活用体系が構築で

きた。整った活用体系を持っているため、派生した意味を持つ「ものだ」を「助動詞化した」形式でなく助動詞として捉えることができると考えられる。

## 2.2 助動詞としての「ものだ」の意味用法

寺村 (1984) は、「PハQモノダ」という文型の「ものだ」を〈本性、本質〉を表す用法としているが、形式名詞としてのモノがダと結びついた構造とし、助動詞化した「ものだ」とは認めていない。また、助動詞化した「ものだ」の意味用法を以下の4つに分類している。

- ① 理想の姿、当為を表わす。

「墨はゆるゆると、すずりの表面をなでるような気持ちでするものです。力を入れて、ごしごしするものではありません。」

- ② 既に起った事件、現象、状態について、どういう成り行きでそうなったのか、その原因は何か、その背後の事情は何か、などを解説的に述べる。

「このガラスの切り口を見ると、だれかが、ダイヤモンドか何か固いもので切ったものらしい。」

- ③ 追想、なつかしさをこめての回想。

「1964年、第一回新興美術展が開かれたときは独立美術の連中多数が参加して、新しい絵画運動の精神にもえたものであった。(後略)」

- ④ 驚き。ある事実(に改めて)驚き、あるいは一種の感慨をおぼえたときの表現。

「(前略)根本は、若いときの彼の顔を思い出し、この男も年を取ったものだなど見ている。敗戦後の苦難と貧乏が堀川をよけいに老けさせたのであろう。」

この分類は、そののちの「ものだ」の研究に(坪根 1994、日本語記述文法研究会編 2003 など)基本的な受け継がれている。つまり、多少違いが見られるが、基本的に助動詞化した「ものだ」には〈本質・傾向<sup>1</sup>〉〈当為〉〈回想〉〈驚き・あきれ〉〈説明・解説〉といった5つの意味用法が認められている。

筆者が考察したところ、〈説明・解説〉を表す「ものだ」は形式名詞としての性質がより強いので、助動詞と認めないことにする。また、〈回想〉は、単に、過去に常態であったこと、くりかえしあったことを述べる言いかた(たとえば英語の 'used to')ではなくて、ある特別の感慨、なつかしさをもって過去をふりかえる情緒的な要素がなければ成立しない(寺村 1984: 304)。寺村 (1984) 以降の研究ではその情緒的な要素を軽んじる傾向がある。事象叙述の側面を重視しながらむりやりに〈本質・傾向〉の用法と関係を築いている。しかし、〈本質・傾向〉のような事態を述べるところに重点

---

<sup>1</sup> 〈本性〉や〈本質〉〈傾向〉などは同じ意味用法を表す異なった呼び方である。寺村 (1984) では助動詞化した「ものだ」と認められていない〈本性・本質〉の使い方は、そののちの研究でほとんど助動詞化したものとみなされている。

を置いている用法、および〈当為〉のような行為の実行を働きかける用法とは異なり、〈回想〉は〈驚き・あきれ〉と同様に事態に対するある感情を表すところに重点が置かれた用法であると言えるだろう。よって、〈回想〉と〈驚き・あきれ〉を1つに統一させる。またその中で感情表出の強さに段階性があると考えられる。この点に関しては別稿に譲りたいが、「ものだ」に前接した連体修飾部はテンス分化が許されるかどうかということに基づいて「ものだ」の意味用法を整理する。

- テンス分化が許されない（非タ形しか許されない）：
  - ①〈一般性〉：個人の考えや判断を一般的なものとして引き上げる。物理的な真理を表せなく、個人が思われた一般性のあることである。
  - ②〈当為〉：話し手が常識として収蔵していることを提示することで、聞き手に行為の実行を促すこと。
- テンス分化が許される（非タ形もタ形も許される）：
  - ③〈情緒性〉：ある事柄・できごとに対する懐かしさや意外性、確認性などある特別の感概を軽く表出すること。

〈一般性〉という用語は坪根（1994）で使われた用語を援用したものである。従来〈本性〉や〈傾向〉などの用語で示した意味とはほぼ同様である。ただ筆者は、話し手が個人の考えや判断を一般的なものとして引き上げる点を重視するため、ここでは〈一般性〉を用いることにした。先行研究でよく認められている〈当為〉の用法をそのままに使うことにした。前述したが、〈回想〉と〈驚き・あきれ〉との用法について、事柄・事態に対する感情を表出することに重点を置くため、統一させて〈情緒性〉を名付けた。

### 2.3 モダリティ助動詞の定義と範囲

モダリティ助動詞という用語は中古語の助動詞に関わる研究において出現している。高山（1999）では「ベシ」「マジ」「メリ」「終止ナリ」「ム」「ラム」「ケム」「マシ」「ジ」といった形式をモダリティ助動詞（広義「推量の助動詞」にあたる）と呼んでいる。近藤（2000）では「む」「べし」「らし」のような推量の助動詞（これらは「推量」という名称で概括されているものの、実際には「意志」や「勧誘」など幅広い多くの意味を持つ）を「モダリティの助動詞」と呼んで、中古語のモダリティ全体の中に位置づけている。すなわち、モダリティ助動詞という用語は主に中古語の助動詞研究に用いられている。現代日本語の助動詞研究にモダリティ助動詞という概念が取り込まれたのはおそらく加藤（2006）からである。

モダリティ助動詞とは認識のありようや義務性を表す助動詞である（加藤 2006：36）。助動詞はモダリティに関わる機能を持つもの（モダリティ助動詞）と、主たる機能はモダリティでないもの（非モダリティ助動詞）に分かれる。現代語で一般に用いられる単一要素からなる基本助動詞、および他の品詞の語の複合で生じた複合助動詞、古典語で用いられ現代語では用いられないものの部分的に残存している残存助動詞、といった3つの基準が加えられ、加藤（2006）は次のようにまとめている。

表2 【助動詞の分類（加藤 2006：37）】

	用法種別	基本助動詞	複合助動詞	残存助動詞
非 モ ダ リ テ イ	受動助動詞	れる・られる		
	使役助動詞	せる・させる・す		しむ・しめる
	時制助動詞	た		き・し・けり
	アスペクト助動詞		ている・である	れる
	否定助動詞	ない		ず・ぬ・ん
モ ダ リ テ イ	意志助動詞	う	つもりだ	む・ん
	意志否定助動詞	まい		まじ
	希求助動詞	たい・たがる		
	認識助動詞	らしい	そうだ・ようだ・みたいだ・ かもしれない・だろう…	べし・ごとし
	義務助動詞	べきだ	なければならない・方がい たらいい…	べし
	伝達助動詞		のだ・わけだ	

モダリティ助動詞の用語自体はモダリティという意味論的概念と助動詞という形態論の品詞との結合である。加藤（2006）は、現在の日本語学や言語学での文法研究の成果を踏まえて、可能な限り学校文法の枠組みを活かすことを出発点としている。すなわち、その用語に橋本文法を基盤とする学校文法と言語学の研究文法という距離のある2つの部門を結びつける役割を与えられた。

日本語記述文法研究会編（2003）はモダリティに表現類型のモダリティ、評価のモダリティ、認識のモダリティ、説明のモダリティと伝達のモダリティといった5つを想定し、それぞれに対応した文法形式も挙げている。それらの文法形式、特に評価のモダリティ、認識のモダリティと説明のモダリティを表す諸形式はほとんど助動詞である。モダリティを表す諸々の文法形式は、必ずしもその形式の意味用法のすべてがモダリティ性を持つわけではない。すなわち、「そうだ」「ようだ」「べきだ」のような文法形式が証拠性や必要性を表す場合こそが、モダリティ助動詞と呼ばれるはずである。よって、モダリティ助動詞について精密に定義する必要があると考えられる。まず予めモダリティの定義をあげておく。

〈モダリティ（言表態度）〉とは、現実との関わりにおいて、発話時に話し手の立場からした、言表事態一文の対象的な内容一に対する捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的な態度のあり方を表した部分である。（仁田 1999：35）

益岡（2007）も同様に文の基本的な意味—統語構造を、命題とモダリティという質的に異なった2つの部分からなるという見方に立っている。そして、文の意味的階層構造を立てたうえで、話し手（表現者）の態度（事態の捉え方、文の述べ方）を表す領域をモダリティと呼んでいる。

モダリティの定義に基づいてモダリティ助動詞について定義づけてみよう。

モダリティ助動詞とは、助動詞の諸概念的意味のうち、モダリティ性を担当する部分が前面化したとき、その助動詞をモダリティ助動詞という。

すなわち、モダリティ助動詞を認定するにあたっては、ア) 助動詞であること、イ) モダリティを表していること、という2つの条件が要求されると考えられる。

以上を踏まえて、本稿の検討対象も提示していく。すでに述べたが、本稿の研究対象を「たいものだ」「(し) そうなものだ」「ものだろう」「ものなのだ」という4つの複合形式としている。しかしながら、「ものだ」と複合しうるモダリティ助動詞はその4つに限らない。「ものようだ」や「べきものだ」「ばいいものだ」「なければならぬものだ」などの複合形式における「ものだ」は、「ものだ」の形をとっているが、助動詞と認められないため、本稿の対象外とする。また、「ようなものだ」「らしいものだ」のような表現は、「ものだ」が助動詞として働いていないことに加えて、その前接した「ようだ」と「らしい」の連体形も認識のモダリティを表すものではない。それらも除外する。さらに、「\*ものだかもしれない」は文法的に不適切であるが、「ものだ」を「ものである」に入れ換えて「ものであるかもしれない」にすれば文法性が高まる。本稿は「ものだ」のみに注目して、ほかのバリエーションを検討の対象としない。よって、「ものだ」が助動詞として比較的働くことの多い言語形式に注目すれば、「たいものだ」「(し) そうなものだ」「ものだろう」「ものなのだ」という4つの複合形式に絞られるようになった。

### 3. 助動詞としての「ものだ」とモダリティ助動詞との複合

本節では「たい」「(し) そうだ」「だろう」「のだ」といった4つのモダリティ助動詞と組み合わせてできた複合形式における助動詞の「ものだ」の意味用法を明らかにする。無論、「たいものだ」「(し) そうなものだ」「ものだろう」「ものなのだ」はモダリティ助動詞と「もの+だ」とが合成した複合辞と認められることもあるが、それは考慮に入れないことにする。

#### 3.1 「たいものだ」

日本語記述文法研究会編(2003)では、「たいものだ」は「自分の願望を、変えがたいものとして述べる。実現しにくい願望を述べる場合が多い。」と提示しており、特に「でもらいたいものだ」は「行為が2人称者や3人称者によって実行されることに対する願望を、当然のものとして述べるときに用いられる。」と述べている。しかしながら、その記述がわかりがたいし、希望や願望を表出する「たい」と複合した「たいものだ」と無標の「ものだ」との差異が果たしてどこにあるかも見て取れない。

初山(1992)では、「～たい」で言い切った形は希望を弱めず、直接的に表出するの

に対して、「ものだ」が後続した「たいものだ」は希望の強さを和らげる、あるいは弱める働きをしていると考えている。

- (1) a. 私はどうしても中国に行きたい。  
b. \*私はどうしても中国に行きたいものだ。

(初山 1992 : 22)

「どうしても」という希望を強める表現と「ものだ」という希望を和らげる表現とは矛盾しているため、「どうしても」という希望を強める副詞的要素は「行きたい」と共起できるが、「行きたいものだ」と共起できない、と初山 (1992) は述べている。すなわち、「ものだ」は感情を和らげる機能を持つのである。しかしながら、その機能を持つことに至る理由として、言い切った「～たい」は喚体に近いものであることに対して、「たいものだ」は述体になっているということであると考えられる。述体は喚体ほど感情表出が強いものではないため、「～たい」と比べて「たいものだ」の方が希望の強さが弱まるようになったのである<sup>2</sup>。

- (2) たくさんの労働者、農民、学生、職業人、そしてエリートたちも反対を叫んであちこちで集会をしている。マルコス礼拝をけって許してはならないのである。私たちが目覚めた心でまわりを見回してゆきたいものだ。

(BCCWJ、書籍、奇跡への日日、小野鳥照子 (著)、下線は筆者)

- (3) 「このプロジェクトが一段落したら、私もマレーシアに行ってみたいものだ」

「それは名案です。あそこなら、このように寒くはありません。」

(BCCWJ、書籍、サザンクロス流れて、中島渉 (著)、下線は筆者)

(2) の例を見れば、素直に希望を表出せずに、実現しにくいと思っていることにその実現を望んでいることが読み取れる。「私たちが目覚めた心でまわりを見回してゆきたい」のような「ものだ」を除いた文も成立するが、原文との違いといえば、「～たい」は目の前にある現時点において個人の願望を直接表しているのに対して、「たいものだ」はこのような状況にある私を含む人間は一般に「目覚めた心でまわりを見回してゆきたい」と思うだろうと考えられる。つまり、個人の判断ではなく、私の思うことは多くの人も思うのであろうという趣旨である。(3) では、話し手個人が「マレーシアに行ってみたい」と思ったら「マレーシアに行ってみたい」と言うはずだが、「マレーシアに行ってみたいものだ」は「このプロジェクトが一段落したら、みんな「マレーシアに行ってみたい」と思うだろうという解釈になると考えられる。つまり、普遍性の

---

<sup>2</sup> 例 (1) からやや改変した「中国に行きたいものだ」の「ものだ」は〈情緒性〉の意義がある可能性について査読の先生にご指摘をいただいた。「たいものだ」において〈情緒性〉について検討の余地があると考えられる。

ある「マレーシアに行ってみよう」ことを表すために「ものだ」をつけたわけである。

そのゆえ、「ものだ」をつけることで、個人の願望を一般的な、普遍性のあるものに引き上げて、自分だけではなく、自分を含む人間はこのような状況に臨んでいたら、自分と同じように思うのであろうという判断を示すのである。従って、ある程度の間接性が与えられるため、感情を直接表出する「～たい」より、その強さが和らいでいる。

以上より、「たいものだ」における「ものだ」は〈一般性〉という意味で働いていることを論証した。

### 3.2 「(し) そうなものだ」

証拠性のある推量を表す「(し) そうだ」は「ものだ」と複合すると「(し) そうなものだ」になる。日本語記述文法研究会編(2003)では、「(し) そうなものだ」について、「その事態の実現が、当然のこととして予想されるにも関わらず、実現しないということを表す」と述べている。

- (4) 今度の旅行には遠く松山からくるのであるから、土地の中学から峠まで代表が出迎えに来てよさそうなものだ。出迎えの挨拶までこちらは考えていたのに…。(BCCWJ、書籍、二十世紀の平和論者水野広徳海軍大佐、曾我部泰三郎(著)、下線は筆者)
- (5) 公には「東宮の独立性」を強調するにしても、国民へのアピールという目的を考えれば、せめてプライベートではもう少し、皇后と雅子さまがともに趣味を楽しんだり外出したり、といった交流シーンが見られてよさそうなものだ。もし少しでもそういう機会があれば、宮内庁はここぞとばかりにその風景を公開するであろうから、それさえないということは実際のプライベートな交流もほとんどないに等しいのかもしれない。(BCCWJ、書籍、〈雅子さま〉はあなたと一緒に泣いている、香山リカ(著)、下線は筆者)

「土地の中学から峠まで代表が出迎えに来るべきだけど／来てほしいが」「皇后と雅子さまがともに趣味を楽しんだり外出したり、といった交流シーンが見られるべきだけど／見られてほしいが」という文意で、希望や期待が叶わなかったことを表す。自分の期待や望んでいることと相反している現実や相手の行為に対する非難や苦情、残念な気持ちなどが読み取れる。文法化が進んだことにつれて、「てもよさそうなものだ」は自分の常識や期待と合致していない事態・ことがらに弱い批判を表す一種の慣用句になったと見てよい。「土地の中学から峠まで代表が出迎えに来なかった」「皇后と雅子さまがともに趣味を楽しんだり外出したり、といった交流シーンが見られなかった」という解釈も引き出される。私だけでなく、一緒に旅している誰でも「土地の中学から峠まで代表が出迎えに来てほしい」と思い、国民のみんなも「皇后と雅子さまがともに趣味を楽しんだり外出したり、といった交流シーンが見られてほしいが」と思うだろうという判断が込められている。

それゆえ、「(し) そうなものだ」における「ものだ」も〈一般性〉を表している

考えられる。

### 3.3 「ものだらう」

日本語記述文法研究会編（2003）では、推量を表す「だらう」が事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表す認識のモダリティ形式として捉えられている。認識のモダリティ形式としての「だらう」と助動詞としての「ものだ」との複合について、「ものだらう」は想定できるが、「\*だらうものだ」は文法的に不適格である。すなわち、認識のモダリティ形式「だらう」の前に「ものだ」が出現するということである。

- (6) 最近は、そんなに激しく感情が揺れることはないが、それでもときに、醒めた表情や、虚ろな眼差しを見せることがある。なにか考えごとでもしているのか、秋葉が話しかけても、答えないこともある。キャリアウーマンに刺戟を受けただけで、こんな変化が起きるものだらうか。他にになにか、あったのではないか…

(BCCWJ、ベストセラー、化身、渡辺淳一（著）、下線は筆者)

- (7) イネが、列島を北進する過程で、寒冷地に向く「早生化」の突然変異を生じていった…（中略）北進のスピードが数千年オーダーのものだったならとにかく、二百～三百年の間に、そんな都合のよい突然変異が積み重なるものだらうか。

(BCCWJ、書籍、図説・邪馬台国物産帳、柏原精一（著）、下線は筆者)

- (8) こんな山の途中にあるレストランにくる人などいるものだらうかと思ったが、日本とはちがう生活リズムや、食に対する、あるいは時間に対する認識をもっている国はたくさんある、だから、のどかな山の中腹のレストランでも車を飛ばしてやってくる人たちはいるものだらう。

(BCCWJ、ベストセラー、ダディ、郷ひろみ（著）、下線は筆者)

(6)～(8)の例から、「ものだらう」に疑問のモダリティ形式「か」が常に後続していることがわかった。いずれも「だらう」を取り外して、「こんな変化が起きるものか」「そんな都合のよい突然変異が積み重なるものか」「こんな山の途中にあるレストランにくる人などいるものか」という文になっても不自然ではない。そして、「もの」を削除して「こんな変化が起きるだらうか」「そんな都合のよい突然変異が積み重なるだらうか」「こんな山の途中にあるレストランにくる人などいるだらうか」になっても自然であろう。前者のほうは「ものか」という反語的な意味を表す形式が存在しており、「こんな変化が起きらない」や「こんな変化が起きるとは思わない」などの解釈が引き出されるのである。一方、後者の「だらうか」は疑問文から派生して得られたもので、逆の判断が成り立つことを前提として、聞き手や話し手自身へ問いかけることによって反語解釈が出てくるのである。「ものだらうか」における反語解釈は、「ものか」でなく「だらうか」によって出てきたニュアンスであると考えられる。すなわち、「ものだらうか」は〈一般性〉を表す「ものだ」に認識のモダリティ形式「だらう」を後接させてから、疑問のモダリティ形式「か」を結びつけてできた形式であると考えられる。よって、「一般的に、キャリアウーマンに刺戟を受けただけで、こんな変化が起き

るわけにはいかないと思う」「一般的に、二百～三百年の間に、そんな都合のよい変異が積み重なるとは思わない」「一般的に、こんな山の途中にあるレストランにくる人などいない」という自分を含む人間は自分と同じように思うのであろう、という普遍性のある考えを示しながら、話し手の判断を伝えることになると考えられる。

また、疑問詞の「か」を取り除ければ、「キャリアウーマンに刺戟を受けただけで、こんな変化が起きるものだろう」という文になると、文意が変わり、反語解釈が出てこなくなる。つまり、疑問のモダリティ形式の「か」が「だろう」に後接すると反語解釈が出てくるため、「ものだろうか」は逆の判断が成り立つことを前提として、みんなは自分と同じように〈一般的にそうとは思わない〉〈一般的にそんなことがあるわけにはいかないと思う〉という事態・ことがらに対する不信や疑いを抱いた解釈になると考えられる。よって、「ものだろう」における助動詞としての「ものだ」と認識のモダリティ形式としての「だろう」はいずれも独自の意味を保有していると思われる。さらに、「ものだ」が〈一般性〉の意味用法として用いられるとき、その直前に現れる動詞にテンス分化がなく、非タ形しか許されないという使用制限があることは見て取れる。

要するに、推量を表す認識のモダリティ形式「だろう」と複合した「ものだろう」における「ものだ」は助動詞として働くとき、〈一般性〉の意味用法を表すことになると考えられる。また、常に疑問詞「か」と伴っている「ものだろう」は反語と解釈しやすいため、「ものだ」は〈一般性〉のほか、〈情緒性〉というニュアンスも読み取れるのではないかと考えられる。

### 3.4 「ものなのだ」

いわゆる説明のモダリティ形式の「のだ」と複合してできた「ものなのだ」は、助動詞化した「ものだ」の連体形に説明のモダリティ形式を後接させてできたもの、つまり「ものな+のだ」の構造とみなすべきなのか、もしくは「のだ」の前に形式名詞の「もの」がくるため、コンピュータの「だ」の連体形を介在させてつくった「もの+な+のだ」の構造とみてよいただろうか。

(9) しよせん、大言壮語は自信のない人間が自分を大きく見せようとしてするものなのだ。

(BCCWJ、書籍、仕事ができる人できない人、堀場雅夫(著)、下線は筆者)

(9)における「ものなのだ」は動詞の非タ形に接続しながら、「もの」が「大言壮語は」という主題をうけて、形式名詞として働いていると思われる。これは明らかに「もの+な+のだ」の構造パターンである。問題となるのは、次のような文である。

(10) ときとして、愛情より憎悪のほうが鋭い目を持つものなのだ。(BCCWJ、書籍、出口なき荒野、チャールズ・トッド(著)山本やよい(訳)、下線は筆者)

(11) 四月中旬になると冬至のころに較べて三時間以上も長く、時間のかかるロング

コースも歩けるようになる。御前山と大岳山、川苔山と本仁田山(千二百二十五メートル)というように二つの山のハシゴもできるだろうし、なにしろ日が長いと気分的にもずいぶん楽になってくるものなのだ。日没に追いかけられる、あの晩秋の焦慮感もいまはない。

(BCCWJ、書籍、低山を歩く、横山厚夫(著)、下線は筆者)

- (12) ヒントがそれだけしかなくても、同級生を次から次へとたどって行けば、電話一本で百パーセント、本人にたどりつけるものなのだ。だが、自分で意識的に姿を消したケースは、たどろうにもたどる術がない。

(BCCWJ、書籍、謀殺列島赤の殺人事件、木谷恭介(著)、下線は筆者)

(10) では「愛情より憎悪のほうが鋭い目を持つものなのだ」が単独で一つの文になれば「ものだ」は〈一般性〉を表す助動詞であると考えられるが、「ときとして」という副詞的な修飾成分が先行しているため、「ものだ」の〈一般性〉が制限されるようになった<sup>3</sup>。従って、「ものな(「ものだ」の連体形)+のだ」の構成パターンが解釈しにくくなった。また、「もの」と主語との照応が想定しがたいため、「もの+だ」と「ものだ」の中間段階にあるのではないかと考えている。つまり、「もの+だ」と「ものだ」とは必ずしも排他的な関係でなく、副詞的な修飾成分の追加や削除などの作業をすることによって連続的な段階性が浮かび上がると考えられる。

(11) と (12) における「もの」は何らかの主語や主題を受けていると想定しがたいものである。「一般的には、日が長いと気分的にもずいぶん楽になってくるのだ」「同級生を次から次へとたどって行けば、電話一本で百パーセント、本人にたどりつけるのは一般的なことだ」といった解釈が意味的に自然であると考えられる。すなわち、(11) と (12) における「ものだ」は同様に個人的な判断を込めての〈一般性〉を表している。よって、この場合の「ものなのだ」を「ものな(「ものだ」の連体形)+のだ」の構造パターンとみなすのが妥当である。また、意味上も助動詞としての「ものだ」の〈一般性〉と「のだ」の〈説明〉という意味の結合であると考えられる。

---

<sup>3</sup> 査読の先生から「ときとして、愛情より憎悪のほうが鋭い目を持つものなわけだ。」の文も文法的に成立しているが、これを考察に含めないのはなぜなのかというご指摘をいただいた。それは例(10)と同様に、〈一般性〉が「ときとして」の副詞的成分に制限されていると考えられる。また、「ものなわけだ」という複合形式について、BCCWJでその例文を調べてみると、2つしか見つからなかった。考察したところ、いずれも形式名詞の「もの」の後ろに「わけだ」がくるため、コンピュータの「だ」の連体形を介在させて作られた複合形式であるとわかった。当然のことながら、BCCWJの検索結果ですべての現象を十分に説明できるわけにはいかないが、ある用法はよく使われるかどうかということを検証できると考えられる。その2つの例文から、「ものなわけだ」の場合は「ものな」が助動詞の「ものだ」の連体形と認めがたいと考えられる。

要するに、「ものなのだ」は「もの+な(「だ」の連体形)+のだ」と「ものな(「もの」の連体形)+のだ」といった2つの構成タイプに解釈できる。前者は「もの」が主語や主題を受けることが多い一方、後者は「ものだ」が助動詞として働いており、〈一般性〉を表しているのである。いずれの「のだ」も説明のモダリティを表す助動詞であると考えられる。

以上の検討により、「たいものだ」「(し) そうなものだ」「ものだろう」「ものなのだ」といった4つの複合形式における助動詞の「ものだ」の意味用法を明らかにした。場合によって〈情緒性〉を読み取れることがあるが、全体的にいずれも〈一般性〉を表していると考えられる。

#### 4. 4つの形式の承接順序からみるモダリティの範囲

3節において、「たいものだ」「(し) そうなものだ」「ものだろう」「ものなのだ」といった4つの複合形式における「ものだ」は助動詞として働くことがあり、しかも〈一般性〉を表すことがわかった。しかしながら、なぜ「ものだ」は「～たい」と「(し) そうだ」の後ろに承接している一方で、「だろう」と「のだ」に前接しているのか。その承接順序についても検討を加える。

モダリティについての研究のほとんどは、文が命題とモダリティという質的に異なった2つの部分からなるという見方を立っている。仁田(1999)は「現実との関わりにおいて、発話時に話し手の立場からした、言表事態一文の対象的な内容一に対する捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的な態度のあり方を表した部分」(仁田1999:35)をモダリティとして捉えて、益岡(2007)は文の意味的階層構造を立てた上で、「判断のモダリティ」の領域と「発話のモダリティ」の領域をモダリティとし、事態を表す領域—命題—と区別している。事態の捉え方や文の述べ方を表す部分がモダリティであり、それは命題につくもので、命題の外側にありながら命題とともに文を形成することが見てとれる。



図2 日本語文の基本構造(仁田1991:17)(図1の再掲)

言表事態=命題、言表態度=モダリティという仁田(1991)、つまり図1で示しているような文の基本構造に筆者が疑問を抱いている。

「ものだ」は評価のモダリティや価値判断のモダリティを表す形式と認められるが、派生した意味用法のすべてがモダリティ性を持つか、もしくはそのうち限られた用法で用いられた「ものだ」がモダリティ形式と認められるべきなのかが先行研究ではまだはっきりしていないところである。日本語記述文法研究会編(2003)では「ものだ」

に関する諸々の意味用法をあげて説明するだけで、どちらがモダリティ性を持つのか特定しがたい。高梨（2010）は〈当為〉を表す「ものだ」しか評価のモダリティ形式と位置付けていない。益岡（2007）も当該事物に対する話し手の経験的認識が価値的な性質を帯びているため、事態の望ましさを表す「ものだ」を、価値判断のモダリティ形式に帰属させている。しかしながら、それと同時に、(13)のような「X（事物）ハ Y（事態）モノダ」の構造を取る文型における「モノダ」は当該の事物（ヒトを含む）に対する話し手の認識を表せると益岡（2007）が指摘している。その話し手の認識は、自己の経験に根ざすものである（益岡 2007：224）。そして、「モノダ」は事態の望ましさを表す場合も、話し手の経験に基づく認識に支えられている（益岡 2007：225）。そうならば、事態の望ましさを表す「ものだ」は価値判断のモダリティ形式と認められるが、ほかの意味用法、特に〈一般性〉がモダリティ性を持たないものと断定できない。「ものだ」が表す〈一般性〉は物理的な存在や真理（例（14））のことでなく、話し手が個人の考えを一般的なものと捉えられるレベルに引き上げるといった認識的なプロセスが底にあると考えられる。よって、〈一般性〉を表す「ものだ」は認識のモダリティを表す文法形式の一種と認められたほうが妥当であると考えられる。

- (13) 人生は思い通りにはいかないものだ。 益岡（2007：224）  
 (14) a. 地球は太陽を公転している。  
 b. \*地球は太陽を公転するものだ。

益岡（2007）は、「たい」を発話類型のモダリティの下位類とされている情意型（情意伝達／情意表出）のモダリティ形式として捉えており、文の類型から「たい」を扱っている点で日本語記述文法研究会編（2003）と同様である。「(し) そうだ」は益岡（2007）で判断のモダリティにおける真偽判断のモダリティとして捉えられている。益岡（2007）でいう「真偽判断のモダリティ」における概念の定義や特定した文法形式はほとんど認識のモダリティと同様である。ここではすこし整理を行い、「たい」を「情意表出」のモダリティ形式とし、「(し) そうだ」を認識のモダリティにおける推量を表す形式とする。それゆえ、「たいものだ」と「(し) そうなものだ」は以下のような形でまとめられる。

- (15) たいものだ＝〈情意表出〉たい＋〈一般性〉ものだ  
 (し) そうなものだ＝〈推量〉(し) そうだ<sub>述体形</sub>＋〈一般性〉ものだ

益岡（2007）は、文の意味的階層構造を立て、そのうちに4つの階層があると主張している。「一般事態」の領域と「個別事態」の領域は命題をなし、「判断のモダリティ」の領域と「発話のモダリティ」の領域はモダリティを形成するとされている。

- (16) 私たちも目覚めた心でまわりを見回してゆきたいものだ。（例（2）の一部を再掲）  
 (17) 今度の旅行には遠く松山からくるのであるから、土地の中学から峠まで代表が

出迎えに来ててもよさそうなものだ。(例 (4) の一部を再掲)

すなわち、「私たちが目覚めた心でまわりを見回してゆく」が命題にあたり、「たいものだ」がモダリティとして話し手の心的態度を表すものである。(17)において命題に当たる部分は「今度の旅行には遠く松山からくるのであるから、土地の中学から峠まで代表が出迎えに来る」であり、前述したように、「てもよさそうなものだ」は慣用句のようなものとして使用されることがあるため、それを一つのまとまりとしてモダリティを表すものとしている。

「たいものだ」「(てもよさ) そうなものだ」が一つのモダリティ形式として認められるが、(15)で示しているように、その内部にもまだ細分化できると考えられる。益岡(2007)の考えに従えば、モダリティ形式の外側にあるものはモダリティにはかならない。すなわち、「たい」と「(し) そうだ」の外側にある「ものだ」はモダリティ形式しかない。そのことも〈一般性〉を表す「ものだ」がモダリティ性を持つ証拠となる。

さらに、「たい」と「(し) そうだ」とはほかのモダリティ形式と重なる場合、命題に緊密に接続して離れることがないことがわかった。

(18)  $\sim V + \text{たい} + \text{ものだ}$

$\sim V_{\text{連体形}} + \text{そう} \text{だ}_{\text{連体形}} + \text{ものだ}$

「 $\sim V$ 」の部分が命題で、後ろにくるすべてがモダリティと認める考え方が多いが、2つのモダリティ形式が重なった場合、命題とその命題に隣接したモダリティ、つまり「 $\sim V + \text{たい}$ 」と「 $\sim V_{\text{連体形}} + \text{そう} \text{だ}_{\text{連体形}}$ 」とは「命題に近いもの」になったと考えられる。それは後述する「だろう」と「のだ」との性質に相違が見られる。

益岡(2007)は「だろう」を判断のモダリティの下位類とされ、真偽判断のモダリティと認めている。「のだ」を判断のモダリティの領域と発話のモダリティ領域にまたがる説明のモダリティと位置付けている。「ものだろう」と「ものなのだ」とも(19)のようにまとめられる。

(19) ものだろう = 〈一般性〉ものだ + 〈推量〉だろう

ものなのだ = 〈一般性〉ものだ<sub>連体形</sub> + 〈説明〉のだ

そして、益岡(2007)における文の意味的階層構造に従って考えれば、(20)と(21)の命題はそれぞれ「キャリアウーマンに刺戟を受けたただで、こんな変化が起きる」 「ヒントがそれだけしかなくても、同級生を次から次へとたどって行けば、電話一本で百パーセント、本人にたどりつける」にあたる。

(20) キャリアウーマンに刺戟を受けたただで、こんな変化が起きるものだろうか。

(例 (6) の一部を再掲)

(21) ヒントがそれだけしかなくても、同級生を次から次へとたどって行けば、電話一本で百パーセント、本人にたどりつけるものなのだ。(例 (12) の一部を再掲)

前述した通り、〈一般性〉を表す「ものだ」もモダリティ形式と認められるため、(20)と(21)における「ものだろうか」と「ものなのだ」とはモダリティを担当する部分になる。

(22) ~V+ものだ+だろう  
~V+ものだ<sub>連体形</sub>+のだ

それでは、〈一般性〉を表す「ものだ」はそれぞれ認識のモダリティ形式「だろう」、説明のモダリティ形式「のだ」と複合した場合、どういう事情が発生するかということ、命題に隣接した〈一般性〉を表す「ものだ」が命題の中に入ってしまう、命題とともに「命題に近いもの」になったと考えられる。すなわち、そもそも命題にあたる「~V」の部分は、その後ろにくるモダリティ形式が重なっているため、命題に近い「ものだ」がその内部に入り込んだのである。それゆえ、「だろう」と「のだ」とは命題の外側にあるモダリティ形式と言えるだろう。それは命題の内部に入りうる「たい」と「(し) そうだ」とはまったく異なった性質を持っていると考えられる。

このように、モダリティは命題の外側にあるという観点は賛成しがたいことになる。命題の外側にあるモダリティもあるし、命題の内部に入りうるモダリティもあると考えられる。すなわち、命題とモダリティの間には、明確な境界線が存在していない。中間的、重なるものも存在している。

## 5. 終わりに

「たい」「(し) そうだ」「だろう」「のだ」といった4つのモダリティ助動詞は助動詞としての「ものだ」と複合することができる。その複合形式である「たいものだ」「(し) そうなものだ」「ものだろうか」「ものなのだ」におけるいずれの「ものだ」も〈一般性〉を表していることを明らかにした。「ものだ」を含まない「たい」「(し) そうだ」「だろう」「のだ」といった無標形式との差異といえば、「ものだ」のついたほうが、ある特定の場面において誰もが自分と同じように思うだろうという個人的な判断が込められたものになる。

また、一つのまとまりのモダリティ形式とみなしうるその4つの複合辞はさらに細分化できる。〈一般性〉を表す「ものだ」もモダリティ形式の一種であると考えられる。命題の内部に入りうる「たい」と「(し) そうだ」とは命題とともに「命題に近いもの」になった。一方、「ものだろうか」と「ものなのだ」における「だろう」と「のだ」は命題の外側にしかなく、「ものだ」は命題の内部に入り込んで命題とともに「命題に近いもの」になった。すなわち、モダリティ形式が隣接したとき、命題に近いものが命題の内部に入ることがある。文を構成する命題とモダリティとは排他的なものではな

く、融合することがあるのである。したがって、モダリティには、命題の内部に入りうるモダリティと、命題の外側にしか存在しないモダリティという2つの階層が想定できる。このように、モダリティの範囲をすこし広げて捉えられるようになった。

## 参考文献：

- 加藤重広（2006）『日本語文法入門ハンドブック』研究社。  
近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房。  
高梨信乃（2010）『評価のモダリティ：現代日本語における記述的研究』くろしお出版。  
高山善行（1999）「モダリティ助動詞の相互承接—『源氏物語』における—」『大手前女子大学論集』33：25-39。  
坪根由香里（1994）「『ものだ』に関する一考察」『日本語教育』84：65-77。  
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。  
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房。  
仁田義雄（1999）「モダリティを求めて」『言語』28（6）：34-44，大修館書店。  
日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版。  
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探求』くろしお出版。  
初山洋介（1992）「文末の「モノダ」の多義構造」『言語文化論集』14（1）：19-31，名古屋大学。

## 〈付記〉

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものです。そして、本稿は北海道大学国語国文学会 2022 年度大会において「モダリティ助動詞と複合した「ものだ」の性質」のテーマで口頭発表した内容を加筆し修正したものです。発表の席上や査読の過程で貴重なご意見をくださった先生方に感謝を申し上げます。ご指導くださった加藤重広先生にはたいへん感謝しております。また、本誌の査読者にたいへん有益なご指摘をいただきましたことを、心よりお礼申し上げます。

（ちょう りきたん・北海道大学大学院博士後期課程）